

高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説「数学編 理数編」(p.248)にケプラーの法則を扱うこととあります。新課程の数学Cでは行列が復活するため、これを利用した証明を与えます。また、外積を使う証明と使わないで済む証明法も与えます。

ケプラーの法則

- 第1法則：惑星は太陽を焦点の1つとする楕円軌道を描く。
- 第2法則：惑星と太陽を結ぶ線分が単位時間に描く面積(面積速度)は一定である。
- 第3法則：各惑星の公転周期 T の2乗は、楕円軌道の半長軸 a の3乗に比例する。 k を比例定数とすると、 $T^2 = ka^3$ が成り立つ。

太陽の位置を O 、惑星の位置を P とし、 $X = \overrightarrow{OP}$ とする。太陽と惑星の質量をそれぞれ M 、 m とすると、万有引力の法則から

$$m\ddot{X} = -G\frac{Mm}{|X|^3}X \quad (G \text{ は万有引力定数}) \quad (1)$$

が成立する。このとき、 X は時刻 t の関数とし、 $\dot{X} = \frac{d}{dt}X$ 、 $\ddot{X} = \frac{d}{dt}\dot{X}$ とおく。

(1) より

$$X \times \ddot{X} = -G\frac{M}{|X|^3}X \times X = 0$$

次に $X \times \dot{X}$ を微分すると

$$\frac{d}{dt}(X \times \dot{X}) = \dot{X} \times \dot{X} + X \times \ddot{X} = X \times \ddot{X} = 0$$

したがって、 $X \times \dot{X}$ は定ベクトルであるから、これを N とすると面積速度

$$\frac{1}{2}|X \times \dot{X}| = \frac{1}{2}|N|$$

は一定であり(第2法則)、 $P(X)$ は N を法ベクトルとする平面上を運動する。

したがって、 $P(X)$ を O を原点する座標平面上の点の運動として考えてもよい。
 $r = |X|$ とし、 r, θ を t の関数とする。

$$X = r \begin{pmatrix} \cos \theta \\ \sin \theta \end{pmatrix}$$

とにおいて、これを t について微分すると

$$\dot{X} = \dot{r} \begin{pmatrix} \cos \theta \\ \sin \theta \end{pmatrix} + r\dot{\theta} \begin{pmatrix} -\sin \theta \\ \cos \theta \end{pmatrix}$$

さらに、 t について微分すると

$$\begin{aligned} \ddot{X} &= \ddot{r} \begin{pmatrix} \cos \theta \\ \sin \theta \end{pmatrix} + 2\dot{r}\dot{\theta} \begin{pmatrix} -\sin \theta \\ \cos \theta \end{pmatrix} + r\ddot{\theta} \begin{pmatrix} -\sin \theta \\ \cos \theta \end{pmatrix} - r\dot{\theta}^2 \begin{pmatrix} \cos \theta \\ \sin \theta \end{pmatrix} \\ &= (\ddot{r} - r\dot{\theta}^2) \begin{pmatrix} \cos \theta \\ \sin \theta \end{pmatrix} + (2\dot{r}\dot{\theta} + r\ddot{\theta}) \begin{pmatrix} -\sin \theta \\ \cos \theta \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \ddot{r} - r\dot{\theta}^2 \\ 2\dot{r}\dot{\theta} + r\ddot{\theta} \end{pmatrix} \end{aligned} \quad (2)$$

(1) を平面上の点とすると

$$\ddot{X} = -\frac{GM}{r^2} \begin{pmatrix} \cos \theta \\ \sin \theta \end{pmatrix} \quad (3)$$

(2) と (3) より

$$\begin{aligned} \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \ddot{r} - r\dot{\theta}^2 \\ 2\dot{r}\dot{\theta} + r\ddot{\theta} \end{pmatrix} &= -\frac{GM}{r^2} \begin{pmatrix} \cos \theta \\ \sin \theta \end{pmatrix} \\ \begin{pmatrix} \ddot{r} - r\dot{\theta}^2 \\ 2\dot{r}\dot{\theta} + r\ddot{\theta} \end{pmatrix} &= -\frac{GM}{r^2} \begin{pmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ -\sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \cos \theta \\ \sin \theta \end{pmatrix} \\ \begin{pmatrix} \ddot{r} - r\dot{\theta}^2 \\ 2\dot{r}\dot{\theta} + r\ddot{\theta} \end{pmatrix} &= -\frac{GM}{r^2} \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

したがって

$$\ddot{r} - r\dot{\theta}^2 = -\frac{GM}{r^2}, \quad 2\dot{r}\dot{\theta} + r\ddot{\theta} = 0 \quad (4)$$

(4) の第 2 式から

$$2r\dot{\theta} + r^2\ddot{\theta} = 0 \quad \text{すなわち} \quad \frac{d}{dt}(r^2\dot{\theta}) = 0 \quad (5)$$

面積速度 $\frac{1}{2}r^2\dot{\theta}$ が定数となるから、これからも第 2 法則が確認できる。

(5) から, $r^2\dot{\theta} = C$ (C は定数) とおくと

$$\dot{\theta} = \frac{C}{r^2} \quad (6)$$

(6) を (4) の第 1 式に代入すると

$$\ddot{r} - \frac{C^2}{r^3} = -\frac{GM}{r^2} \quad (7)$$

ここで, $r = \frac{1}{s}$ とおいて, t で微分すると

$$\dot{r} = -\frac{1}{s^2} \frac{ds}{dt} = -r^2 \frac{ds}{d\theta} \cdot \frac{d\theta}{dt} = -r^2 \dot{\theta} \frac{ds}{d\theta} = -C \frac{ds}{d\theta}$$

上式をさらに t で微分すると

$$\ddot{r} = -C \frac{d^2s}{d\theta^2} \cdot \frac{d\theta}{dt} = -C \dot{\theta} \frac{d^2s}{d\theta^2} = -\frac{C^2}{r^2} \cdot \frac{d^2s}{d\theta^2} \quad (8)$$

(8) を (7) にすると

$$-\frac{C^2}{r^2} \cdot \frac{d^2s}{d\theta^2} - \frac{C^2}{r^3} = -\frac{GM}{r^2} \quad \text{ゆえに} \quad \frac{d^2s}{d\theta^2} = -s + \frac{GM}{C^2}$$

したがって

$$\frac{d^2}{d\theta^2} \left(s - \frac{GM}{C^2} \right) = - \left(s - \frac{GM}{C^2} \right)$$

これを解くと

$$s - \frac{GM}{C^2} = A \cos(\theta + B)$$

となる (A, B は定数で, 初期条件により決定する). 上式から

$$r = \frac{1}{\frac{GM}{C^2} + A \cos(\theta + B)} = \frac{\frac{C^2}{GM}}{1 + \frac{AC^2}{GM} \cos(\theta + B)}$$

$A \geq 0$ となるように, B をとり, $e = \frac{AC^2}{GM}$, $\lambda = \frac{C^2}{GM}$ とおくと

$$r = \frac{\lambda}{1 + e \cos(\theta + B)} \quad (9)$$

P(X) が楕円軌道を描くのは, $0 < e < 1$ のとき ($e = 0$ のとき円) である (第 1 法則).
 なお, $e = 1$ のときは放物線, $e > 1$ のときは双曲線となる.

$0 < e < 1$ のとき、楕円の長軸の長さを $2a$ 、短軸の長さを $2b$ とすると、(9) より

$$2a = \frac{\lambda}{1+e} + \frac{\lambda}{1-e}, \quad b = a\sqrt{1-e^2}$$

これを解いて

$$a = \frac{\lambda}{1-e^2}, \quad b = \frac{\lambda}{\sqrt{1-e^2}}$$

P(X) の面積速度 $\frac{1}{2}r^2\dot{\theta} = \frac{C}{2}$ および楕円の面積 πab より、公転周期 T は

$$T = \frac{\pi ab}{\frac{C}{2}} = \frac{2\pi ab}{C} = \frac{2\lambda^2}{C(1-e^2)^{\frac{3}{2}}}$$

両辺を平方すると

$$T^2 = \frac{4\lambda^4}{C^2(1-e^2)^3} = \frac{4\lambda}{C^2} \left(\frac{\lambda}{1-e^2} \right)^3 = \frac{4\lambda}{C^2} a^3$$

$k = \frac{4\lambda}{C^2}$ とおくと、次の第3法則が成立する。

$$T^2 = ka^3$$

補足

(1)において, $X = (x, y, z)$ とすると

$$\ddot{x} = -\frac{GM}{r^3}x, \quad \ddot{y} = -\frac{GM}{r^3}y, \quad \ddot{z} = -\frac{GM}{r^3}z$$

であるから

$$y\ddot{z} - \ddot{y}z = 0, \quad z\ddot{x} - \ddot{z}x = 0, \quad x\ddot{y} - \ddot{x}y = 0$$

これから

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}(y\dot{z} - \dot{y}z) &= y\ddot{z} - \ddot{y}z = 0, \\ \frac{d}{dt}(z\dot{x} - \dot{z}x) &= z\ddot{x} - \ddot{z}x = 0, \\ \frac{d}{dt}(x\dot{y} - \dot{x}y) &= x\ddot{y} - \ddot{x}y = 0 \end{aligned}$$

$y\dot{z} - \dot{y}z$, $z\dot{x} - \dot{z}x$, $x\dot{y} - \dot{x}y$ は, 定数となるから

$$a = y\dot{z} - \dot{y}z, \quad b = z\dot{x} - \dot{z}x, \quad c = x\dot{y} - \dot{x}y$$

とおくと

$$ax + by + cz = 0$$

が成立する. 上式から点 $P(X)$ は原点 O を通り, 法ベクトルが $N = (a, b, c)$ である平面上を運動する¹.

¹昭和 59 年 3 月以前の高卒者は授業で学んでいた.